Project	地域協働専攻　国際協働グループ
A01	「生理の貧困」対策プロジェクト
メンバー	[学生]　加賀谷礼奈　藤田あい　川村里侑　大家わかな　遠藤果鈴 [担当教員]　有井晴香　津曲真樹

【背景】

「経済的な理由により生理用品を購入できない」等をはじめとした生理を取り巻く課題は函館市内にも存在しており、十分な対策がなされているとは言えない状況である。そこで本プロジェクトでは、多くの女性が生理による不安・生きづらさから解放され、自由に安心して生きていくためには、どのようなまちづくりをしていくべきかを検討し、その実現に貢献するための活動を実践することとした。

【目的】

活動を通して生理を取り巻く社会課題の本質を見極め、根本的な課題解決に向けたアプローチ方法を検討する。特に函館市内の実態について理解し、課題解決に向け貢献することを目指す。

【概要】

前期の活動では、函館市内で生理に関する支援に携わっている方々へのインタビューや学内でのアンケート調査、文献調査を通して学びを深めた。前期での調査結果を踏まえ、後期では生理の話がタブー化してしまっている社会の風潮に目を向け、市内での講演会や啓発ポスターの掲示等を行った。

【プロセスと成果】

〈前期〉アンケート調査やインタビューの実施を通して函館市内における生理の貧困の現状を学んだ

1．学内アンケートの実施（5～6月）

大学生の生理に関する意識の実態を明らかにするためアンケート調査を行った。調査結果からは「（1）男子学生にとって生理の話題は身近ではない」、「（2）特別な理由はないが、生理について話題にしてはいけないという雰囲気がある」、「（3）生理による生活への支障について教育する必要がある」、「（4）生理の個人差が生理に対する抵抗感を生む場合がある」の以上4点が浮かび上がった。

2.インタビュー調査の実施

（1）一般社団法人「JOY」代表理事　佐々木絵美さん

函館市内での生理用品支援や相談事業についてお話を伺った。生理の貧困の背景には、親に生理用品の購入を頼むことが出来ない状況や、生理に関するタブー感が影響していると仰っていた。

（2）函館市女性センター職員　原田咲さん

「女性つながりサポート事業」について伺った。主に生理用品の配置と相談活動が行われていたが、国からの予算は「コロナ渦で困窮している女性の支援」が目的であり、打ち切られる可能性があるとのことだった。

（3）函館市の高等学校養護教諭　（4）札幌市の中学校養護教諭

生理用品を借りに来る生徒が減り「生理の貧困が見えにくくなったこと」が共通の話題として挙げられた。

〈後期〉前期での学びを踏まえ、生理の貧困について地域の方々や学生に向けた情報発信を行った。

3．講演会・ワークショップの実施（11 月下旬・G スクエア）

目的　様々な年代に「生理の貧困」について知ってもらい、意見交流を通して新たな課題を見つける

内容　講演会：佐々木絵美さんに活動や生理の貧困の現状についてお話いただいた

ワークショップ：講演会参加者と共に、佐々木さんを交えて生理の貧困について意見交流を行った

結果 参加者の話から、高校生の間でも生理についての話はタブーであるというような雰囲気があることを再認識した。加えて生理やナプキンにおける悩み等を全員で包み隠さず話し合える良い機会となった。

4. 生理通信（1～2月）

目的　①生理について関心を持つきっかけにしてほしい②生理の話はタブーという空気を払拭したい
　　③これから教員になる人に生理についての知識を増やしてほしい

内容　「1.PMS アプリについて」「2.これまでのインタビュー記録」「3.進化する生理用品」「4.ピル」

※第3弾の生理用品についてのポスターを掲載すると同時にポスター内で触れた生理用品を学内の数か所のトイレに設置し、その使い心地についてアンケートを取った。

5. 北海道新聞の取材（1 月下旬）

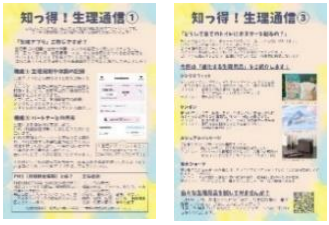
学内に掲示したトイレポスターに関して、北海道新聞から取材を受けた。

【インタビューの様子】

【講演会の様子】

【アンケートポスター】

【知っ得！生理通信】



【総括と反省・今後の課題】

インタビュー調査から「生理の貧困」の背景には様々な要因が絡み合っており、個別に対応が必要であると分かった。また前期での学習を通して「生理の話題をタブー視する空気感」や生理についての「知識の貧困」が、様々な場面で女性が生きづらいと感じてしまう要因の一つではないかと考察した。

これを踏まえ実施したトイレへのポスター掲示では、普段生理について関心の無い層に対しても啓発を行うことができたと考えている。

一方で地域への情報発信については改善が必要である。講演会を実施した際も、上手く集客ができない・参加者の性別や年齢に偏りがあるといった課題が残った。SNS を通じた情報発信や、より多くの人が関心を持てるイベントテーマの設定が求められる。

また後期の活動では、生理の貧困の要因に対し広く複数にアプローチしてしまったことで中途半端な結果に終わってしまった部分があったため、アプローチする課題の焦点化が必要となる。

【地域からの評価】

①石川実和さん（北海道新聞記者）

「生理通信」の実施目的に共感いただき「新聞でも生理の貧困について積極的に取り上げる必要があると感じた」というご感想をいただいた。

実際に本プロジェクトの活動について、北海道新聞に取り上げていただき、学生の力では及ばない範囲まで情報を発信することができた。

②講演会、ワークショップ参加者からの声

・生理の貧困は経済的な困窮が原因で生じるものだと考えていたが、背景には複数の要因があり、様々な角度からのアプローチが必要なのだと感じた。

・普段生理についてオープンに話す機会がなかったため新鮮だった。生理に関する話題は同性間でも話しづらい場面があるので、また参加したい。

・今回学んだ内容を是非男性にも知ってもらいたい

③中間発表へのコメント

・生理の貧困について初めて正面から認識した。中小企業団体としてできる支援があると思った。

【その他】

年間スケジュール

■前期

5 月 26～6 月 15 日　生理に関する学内アンケート
6 月 2 日　「JOY」代表理事インタビュー
6 月 16 日　函館女性センター職員インタビュー
7 月 14 日　函館市の養護教諭インタビュー
8 月 14 日　札幌市の養護教諭インタビュー

■後期

11 月 26 日　講演会開催
12 月 15 日　「知っ得！生理通信①」発行
1 月 15 日　「知っ得！生理通信②」発行
1 月 22 日　「知っ得！生理通信③」発行
　　生理用品の設置
1 月 29 日　「知っ得！生理通信④」発行
2 月 2 日　「知っ得！生理通信」を G スクエアに掲示

最後になりますが、活動にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。